

# 〈秩序〉ある保育環境と集団の〈和〉を醸成する保育実践理論の構築

専攻 学校教育学専攻  
コース 幼年教育コース  
学籍番号 M08029E  
氏名 真田 絵里

## ■ 研究目的

大人世代のマナーやモラルの低下が原因とされる、子どもたちの規範意識や道徳性、コミュニケーション能力の欠如が叫ばれて久しい。他人の存在を意識しない共有空間の私物化や「他」との接触や関わりを好まず「個」を守り貫く人の増加を実感する。

親の就労や生活スタイルの多様さから、家庭以外の場所で過ごすことの多くなった子どもたちは、幼稚園・保育所等で人間関係や規範意識等社会の中で生きていくための様々なスキルや力を身につける必要がある。また、人と関わり過ごす中でマナーやルールは不可欠なものといえる。子どもが安心して生活し、遊ぶためにはその空間に規律、順序、安心、安定、調和という意味を含んだ「秩序」が存在することが不可欠であると考え。物的・人的・空間的に整えられた環境の中では子どもは安定した生活が保障され、遊びにも集中することができる。

他人のことを考えられる人間の集団は互いを思いやるため、調和をもたらす。その状態を「和」とした。日本古来から大事にされてきた「和」の思想と保育の中でみられる「和」について比較検討し、「秩序」ある環境づくりに必要な基盤となる視点を探ろうと試みる。

幼児教育思想家における「秩序」の理論的な整理を行ったうえで、現行の保育所保育指針や幼稚園教育要領における「秩序」の読み取りを行い、理論と実践を往還しながら子どもにとってよりよい保育環境理論を構築していきたいと考える。

## ■ 論文構成

はじめに

### 第1章 保育「秩序」の理論的視座

第1節 徳育的秩序論

第2節 発達の秩序論におけるダイカトミー

第3節 保育所保育指針・幼稚園教育要領にみられる秩序観

### 第2章 保育における秩序

第1節 保育実践における「無秩序」状態

第2節 秩序の伝達者としての保育者

第3節 秩序を作り出す空間構成

### 第3章 幼児の姿に現れる秩序ある育ちとしての「和」

第1節 秩序ある環境から育つ子どもの「和」

第2節 ムラ社会のアナラジーからせまる保育の「和」

第3節 「和」を育む保育実践への展開

おわりに

## ■ 研究の概要

### 第1章 保育「秩序」の理論的視座

保育における「秩序」の概念をめぐる理論的に整理する。第1節では「秩序」を思弁的にとらえ、「秩序」形成にいたる理論的な体系を明らかにすることができた。コメニウスは人間にとっての教育が不可欠であると指摘した上で、その秩序性を大事にして教授することの重要性を述べた。またフレーベルは人々が生来持ち備えている神性を発揮しながら全体として統一することを究極の調和状態、つまり秩序ある状態とみなした。第2節では科学的発想から内的秩序＝発達法則にア

ブローチしようとしたヴィゴツキーとモンテッソーリを取り上げた。ヴィゴツキーは発達最近接領域、モンテッソーリは秩序の敏感期をキーワードに個と集団における秩序のあり方を論究した。両者の視点を止揚すると、秩序ある集団には秩序ある個が存在し、秩序ある個は集団として秩序を生み出す存在となっていることが読み取れた。第3節では、先の思想家の秩序観が現代の保育にどう生かされているか。日本の保育・幼児教育の拠り所であり羅針盤となっている、保育所保育指針・幼稚園教育要領の中での「秩序」について分析・考察を行った。

## 第2章 保育における秩序

保育現場でみられる「秩序」に視点を移す。第1節では保育における「秩序」形成のために、保育室に散見される「無秩序」を抽出し、無秩序の原因についてカテゴリー分けを行うことで、保育における「秩序」形成は主に「安全」を守るため、子どもそれぞれが「安定」して過ごすためのものであることがわかった。保育の場での無秩序状態は子どものSOSのサインであり、それらを整えることで保育空間が子どもにとってより安心して過ごしやすい場となることがわかった。第2節では、環境に秩序を作り出すための重要な要素としての保育者の在り方について言及した。ここでは小川理論を用い、保育者が「気」を操り、子ども一人一人へ援助し、遊びを発展させていく役割を果たすことを確認した。第3節では人的環境以外の空間を構成する要素についての考察を深め、住み心地のよい空間には秩序が存在することを確認した。

## 第3章 幼児の姿に現れる秩序ある育ちとしての「和」

ここでは、「秩序」から生まれる「和」の概念について論究した。第1節では秩序を生み出す保育

者のもとでは、子ども自身秩序を構成する存在となることを明らかにした。調和した雰囲気には「和」が存在する。「和」は「仲良く」、「和らぐ」という意味の他に、けんかしたりやりとりをする中で折り合いをつけた結果生み出されたものも含む。第2節では「和」を具現化した社会の原型として、ムラという日本固有の自立的な社会集団を例示した。そうした集団では「和」は人々の間の不要な軋轢を悪化させない潤滑油として役立つ。保育における「和」とムラ社会でみられる「和」の特徴を捉え、相違点と共通点を比較し、子どもの集団において大事にされる「和」と、日本人が古来から大事にしてきた「和」とは根底において相通じることが明確となった。第3節では、保育における「和」を機軸とした実践事例を挙げた。子どもと「和」を共有する試みは、乳児期からの一斉保育を推進し助長するためのものではなく、周りの存在を知り社会の一員として他者と触れ合い、調和して過ごすことを目的としている。

以上、保育における「秩序」と「和」の関連について論究してきた。空間における「和」の生成は日本人が古来より幼いうちから身体に染み込ませられてきた土着のエートスであるため、「和」を大事にした集団づくり、規律作りを行うことは決して難しくはないはずである。「和」とは日本人の持ち備えた固有の気質や文化を保つために必要とされているものであったため、日本人には昔から根付いている「和」の思想を組み込むと個と集団の関係づくりが自然かつ受け入れられやすいものとなる。

子どもにとって安全で安心して過ごせる環境構成について、「和」をベースに環境構成の視点は今後の保育実践の羅針盤として示唆を与えてくれるものであるといえよう。

主任指導教員 横川 和章 教授  
指導教員 佐藤 哲也 准教授